

No.117

公民館だより

平成15年3月

宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

表彰状

宮津市由良地区公民館

貴館は公民館活動において
優れた成果を収め社会教育の
振興に多大の貢献をされました
ここに優良公民館として
表彰します

平成十四年十月二十四日

文部科学大臣 遠山敦

第五十五回(平成十四年度)

優良公民館表彰

由良地区公民館長

飯澤 登志朗

この度の受賞につきましては
先に回覧で報告しましたが、文

部科学省では、毎年、公民館の
うち、特に事業内容、方法等に
工夫をこらし、地域住民の学習
活動に大きく貢献しているもの
を優良公民館として文部科学大
臣表彰を実施してきました。

本年度は、由良地区公民館を
含む北海道から沖縄まで五十四
公民館が対象となりました。

表彰式は、去る十月二十四日、
東京霞ヶ関ビルで挙行され、引
き続き皇居において天皇、皇后
両陛下に拝謁し、お言葉を賜り
ました。

なお、優良公民館表彰は、昭
和二十三年から実施されて今回
五十五回目にあたりますが、宮
津・与謝管内では初めての受賞
とのこと。真に光栄であり、今

後の公民館活動推進に大きく影
響するものと考えます。

今回の受賞対象となった事業
内容は次の通りです。

『郷土の自然を味わい、参加者
同志の交流や健康の増進を図る
ため、地元観光協会、子ども会
等関係者と連携しながら、地域
をあげて取り組む「由良岳登山」
を毎年実施。幅広い年齢層の参
加を得て地域の連帯意識の形成
を図っている』

その他にも永年取り組んでい
る活動が評価されたもので、公
民館が地域の様々な実践活動、
身近な生涯学習の場として求め
られる期待の大きさを強く感じ
ています。

今後とも由良地区公民館活動
が、ますます発展しますようにご
支援をお願い申し上げます。

行事報告

主事 枝川 隆 亮

◎十月二十四日(木)

由良地区公民館の活動が評価され、優良公民館として文部科学大臣からの栄誉ある表彰を受けるため、館長と共に出張をさせていただきました。

このたびの受賞は歴代の館長をはじめ由良地区民のかたがたの永年にわたる公民館活動が評価されたものと考えています。

◎十月二十七日(日)

歩こう会

「子どものびのび体験活動」

の学習課題として実施しました。当日は西高東低の冬型気圧配置の中、西風が強く寒い日でしたが、子ども十四名を含む三十六名の地区の皆さんに参加をし

ていただきました。

朝九時に里センターを出発し

先ず天王山をめざしました。

港地区北野御膳宮から蜂子皇子船手の地、三庄太夫史跡を見学しました。

今年も「由良の歴史をさぐる

会」の大森章弘氏に「同行をいただき詳細な解説をいただきました。ありがとうございます。

石浦もみじ公園で昼食をとり解散をしました。

日頃、車中より見なれている郷土の風景ですが、実際に歩いて探索するのも良いものだと感じました。

◎十一月三日(日) 文化祭

地区公民館主催の文化祭は昭和五十二年(一九七七)から開催され歴史のある伝統行事になっています。

開催日は晴天であったが非常に西風が強い日にもかかわらず八百余名の地区民のかたがたが来場され、終日里センターは賑わいました。

毎年この文化祭の出版では、区民の格調高い力作や発表を拝見させていただいております。来場者の中からは「私も来年は出展しよう」という積極的な声を聞くことができました。

婦人会主催のバザー・模擬店を始め、多くの関係団体のご協力を得まして盛大に開催することができました。



◎十一月十六日(日) 十一月二十三日(日) 子ども料理教室

子供会連絡協議会との共催で「子どものびのび体験」事業として料理教室を実施しました。

「食改ちどり」で独居老人の皆さんがたに向く食事で活躍されている中西悦子さんを始め、五名の方々に料理指導をお願いし、子どもでも可能な料理を考えていただきました。

豚肉のソースマリネを始め五点のシンプルで難解(?)なメニューに小学生たちが挑戦しました。

六年生女子をリーダーとして料理に挑戦!!

普段は台所に立つ機会の少ない子どもたちであり、なかなかスピーディーに消化できません。指導の先生たちにより何とか無事に料理を完成できました。包丁で手の皮を傷つけた子どももいたが大事に至らず主催者

側としてもホッと胸をなでおろした次第。

試食では献立に苦手な子は長時間かかっても食べられず、又早く食べた子どもたちは、はしやぎだす始末。

子どもに接する難しさを体験しました。

前回の実施では後始末が不充分であったことから、今回はその点について配慮して取り組んだ結果、改善が見られたと思います。

衛生面の厳しいチェックを学んだこと、六年生をリーダーとしての班づくりなど自主的に行動が見られたことなどは評価して良いと思います。

◎十二月八日(日)

人権学習会

今年はソロバン塾を運営されている西野啓子さんに講師をお願いして、実施しました。

西野さんは、平成十三年四月

より約一年間国際協力事業団J A I C A (ジャイカ)の一員として、タイ国に赴任されました。集中力を養い、学力向上に適しているソロバン学習の為の指導者養成という大任を果たされ帰国されました。

国情も生活環境も違う現地での苦労話、エピソードなど貴重な体験談をお聞きしました。

現地の人は、福祉にたよらず(頼れない)貧困の日常生活を過しているが、心は豊かであり、仏教を信じ、感謝の気持ちで毎日充実した生活を送っているという話に感銘を受けました。

我々日本人は物資では充実しているが精神面ではどうなのか。現在の生活を考え直す機会を与えていただいた講演でした。

◎一月十二日(日)

成人式

平成十五年に成人の日を迎えられた皆さん、おめでとごさ

います。

これから大人の一人としての権利と義務、すべてに責任のもてる社会人として、楽しく元気で自分の人生を謳歌して下さい。

由良地区新成人のかたがた(順不同・敬称略)

- 津田 龍一 左近 一真
- 小田原一浩 小松 由弥
- 竹田 一貴 平野裕一郎
- 岸田 周子 濱野 悟
- 田中 清貴 玉垣 俊浩
- 岸田 康伯 山下 妹子
- 中西 優

◎二月二日(日)

四部対抗囲碁大会

恒例の四部対抗囲碁大会が厳寒の二月二日、里センターで開催されました。

団体戦では一部が優勝、個人戦では二部の熊田良雄さんが優勝されました。

以下結果を報告します。

(敬称を略します。)

団体戦

個人戦

- 優勝 一部 熊田良雄
- 準優勝 二部 中西 衛
- 三位 三部 竹村 亮

◎二月九日(日)

自治学級

今年のパネラーとして市議会議員の大森秀朗氏、連合自治会長長の北野誠治氏の両名をお招きし問題提議をしていただきました。討議内容の主なものは次の通りでした。

- 一、下水道整備の早期実現
 - 二、線路山側に住宅地開発
 - 三、農道舗装と市道格上げ
 - 四、山の手国道バイパス
 - 五、幼稚園の新舎屋建築
 - 六、診療所設置問題
 - 七、旧国鉄官舎土地問題
- 予定の二時間をオーバーし白熱した討議が行われました。

地域ふれあい体験活動

由良小学校長・幼稚園長 吉田均

本校では、特色ある学校づくりとして、地域の特性を生かした「浜の子でつかい砂浜教室」の実践を平成八年度から継続しています。自然に親しみ、自然を友として、たくましく生きる子どもの育成を目指し、取組を進めてきました。

また、由良地域の自然、歴史、文化、人々と出会い、ふれあいながら、「ふるさとを学ぶ」「ふるさとに学ぶ」「ふるさとの人々から学ぶ」ことにより、ふるさとを愛し、やさしさと思いやりにあふれる「豊かな心」を育て、そして、自分の生き方や考え方を確かにし、地域の人々と「ともに生きる」ことを目指して、本年度より本格実施となった「総合的な学習の時間」のテーマを「由良キッズふれあいネ

ットワーク」であい、ふれあい、まなびあい、見つめよう、人、もの、自然との関わりにおいてと設定し、これまでの取組を継承しながら、教育目標の「自ら学びたくましく心豊かな児童の育成」の具現化に努めてきました。

一、二年生は生活科で「由良はともだち」「見つけたぞ！由良のひみつ」をテーマに、自分たちの住んでいる由良について学習しました。三年生は「見つけよう！由良の〇〇名人」、四年生は「人にやさしい町」、五年生は「由良の米づくり」、六年生は「人、自分探しの旅」を主な学習単元とし、学習を進めました。

子どもたちは、具体的な体験や観察、見学などを通して感動

したり、驚いたりしながら、様々なことを考え、思い深める中で、地域の生活や社会の在り方で、地域の素晴らしさを学んでいく。そして、学習したことや新たな発見を自分自身の生き方に反映させ、自己を高めていく。このサイクルこそ、「総合的な学習の時間」のねらいとするところであり、今求められている「生きる力」の基盤になるものと言えます。

また、幼稚園でも「自然に親しみ、自然を友としてたくましく生きる子ども」をテーマにして特色ある園づくりを進めてきました。由良地域の自然環境を取り入れ、身近な由良の浜をまたとない環境の一つとして、小学校とも連動して「砂の造形」に取り組んだり、田植えや稲刈りなどの農業体験もさせていたできました。もちつき大会では、米づくりでお世話になった方を招待し、一緒にもちをつきながら感謝の気持ちを表し、収穫の

喜びを味わいました。園児たちは様々な取組を通して、自然の素晴らしさに感動する心や自然を大切にすることを育んだり、地域の皆様方とのふれあいを通して、自立への歩みや人との関わり方を学んだりしたのではないかと思います。

四年生の取組の一つを紹介しますと、四年生は、「デイサービスセンター」「はまなす苑」を訪問し、お年寄りと交流を深めました。まず、九月十二日に「はまなす苑」の施設長さん、看護士さんから、苑の概要についてお話を伺い、その後子どもたちは、十一月十五日までの約二ヶ月間に合計で十五回の訪問を行いました。子どもたちは、リーダーで演奏したり、ふるさと夕やけこやけ、もみじなどお年寄りもよく知っておられる歌をいっしょに歌ったり、ゲーム、クイズ、プレゼントなどをして有意義な時間を過ごしました。何回もの訪問で、一方では大

変さもありませんが、「お客さん」のようにただ歓迎してもらったり、楽しかっただけというのではなく、どんなことがお年寄りに喜んでもらえるのかを考えた時、次はこうしようと職員みんなで一生懸命に出し物を練習したりする姿が見られ、そのことが子どもたち同士の間を強めることにもなりました。また、訪問交流をする前の子どもたちのお年寄りに対するイメージは、白髪、足腰が弱い、あまり色々なことができない、杖、しわなど外見のかつマイナス要素のものが多く、ふだんふれあうことの少なさが感じられました。しかし、交流を重ねる中で、明るい、足腰は弱っていても元気、励ましてくれて優しい、色々なことを知っていて教えてくれる、お話が好き、自分たちよりゲームが上手など、お年寄りに対するイメージがプラスの方向に変化しました。

この取組を通して、自分たち

がこれから社会生活をしていく上で避けて通ることのできない「人権」「福祉」「ボランティア」「介護」などについて、子どもたちなりに意識を高めることができたのではないかと思えます。

それぞれの学年の取組は、地域の皆様方の多大なるご協力によりまして、大きな成果を上げることができました。紙面をお借り致しまして厚くお礼申し上げます。

今後更に学校、家庭、地域社会が緊密な連携を図りながら、豊かな体験活動を実施し、「生きる力」の核となる豊かな人間性を育てる教育を推進していかねければならないと思えます。



学校五日制に思う (3)

二十一世紀を担う子どもは地域の宝

浜野路分館長

大 森 章 弘

(1) 私たちの地域・

家庭の昔と今

子育ては、親だけが担うものではなく学校や地域の様々な人たちに見守られて成長していきます。昔の日本では三世代同居型の家庭が多く、親以外に多くの大人が子どもに接し、それらが全体として家庭教育を担っていました。地域の人々とのつながりも今より密接で、人々がどの家の子どもたちも「地域の子ども」として見守り、育てていたものです。そして、子どもたちも地域の大勢の年の違う子どもと接したり、幼い子どもとの世話をしたりした経験を豊富に持つなど、子育てを支えるしくみや環境がありました。ところが、急速な都市化の進展、職場と住居の分離などに伴い、家族の形態や生活様式は大きく変わり、核家族化や地域のつながりの希薄化が進んだ結果、今日では多くの地域において、子育てを助けてくれる人や子育てについて相談できる人がそばにいないという状態が見られます。このため、自分の子育てに対して戸惑いや不安を感じることがあってもそれをなかなか解決できない現状があるとともに、仕事との両立が難しいという状況もあつて、子育ての負担が親、とりわけ母親のみにかかるようになってきています。

それに加えて、少子化が進む中で、現在の若い世代の多くは、実生活において乳幼児に接した

役目であり、子育て現役世代であるPTAや子育てを終えた世代の人々があらゆる活動の場に積極的に参加してくれるなど、地域一体となつて子育ての機運を高めなければなりません。

兵庫県で行われている、中学生に様々な活動を行わせる「トライやる・ウィーク」のように子どもたちが地域の人々の協力の下で一定期間、商店や会社、福祉施設等で職場体験、ボランティア活動等を行うなど、思春期の子どもに地域で様々な活動を体験させることは、子どもたちの「生きる力」を育成する上で重要であるとともに、このことが、地域の子どもは地域で育てるといふ意識の醸成や体制づくりにもつながると思います。

文部科学省では、平成十四年度から「新子どもプラン」を策定し、完全学校五日制を契機に、地域の人々の協力を得て、子どもたちの放課後や週末等の様々な活動支援やボランティア活動

等の奉仕・体験活動の総合的な取組を進めています。このような施策が積極的に展開されることにより、地域ぐるみでの活動の輪を広げる努力が必要と思います。

(4) 地域等国民が

一体となつた取組の推進

家庭教育の充実のために今最も重要なことは、社会全体が「人づくり」「子育て」「家庭教育」等について共に考え、行動していくことと思います。そのためには、親だけではなく、高齢者、これから親になる世代の若者、企業経営者等も含め、大人社会の一人ひとりが家庭における子育てや教育の充実に向けた「意識改革」を行い、できることから行動に移していかなければならないと思います。また今年度から実施された完全学校週五日制の趣旨なども踏まえ、親と子が十分ふれ合えるよう、家

庭における子育てや教育の充実のための、家庭、学校、地域、職場、行政が一体となつた取組を一層推進しなければなりません。

子育ては、親だけが担うことなく、地域の一人ひとり、みんなが主役なのです。将来の地域を、日本を支える人材を育てることと思うのです。

引用文献

「今後の家庭教育支援の充実について
の懇談会」報告 十四年七月

参考文献

文部科学時報「家庭教育の向上のための支援の取組」 十三年十月号



子供の囲碁教室

熊田良雄

平成十四年十月より「子供の囲碁教室」を月二回開催することになりました。日時は毎月第一と第三の土曜日午後一時より三時まで、場所は由良の里センター、対象は主に小学生です。

囲碁は老若男女すべての方が同様に楽しめるゲームです。勝ち負けを争うものですが、負ければ口惜しい。でも勝てる可能性が十分あったと思わせる余裕があります。それだけ局面が広く、勝負の過程に味わいがあるので。千変万化するゲームの面白さと、お互いをたたえるフェアな勝負感をあわせ持った囲碁は、まさに万人の趣味と言えます。

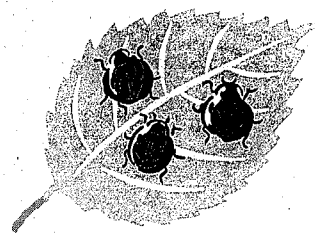
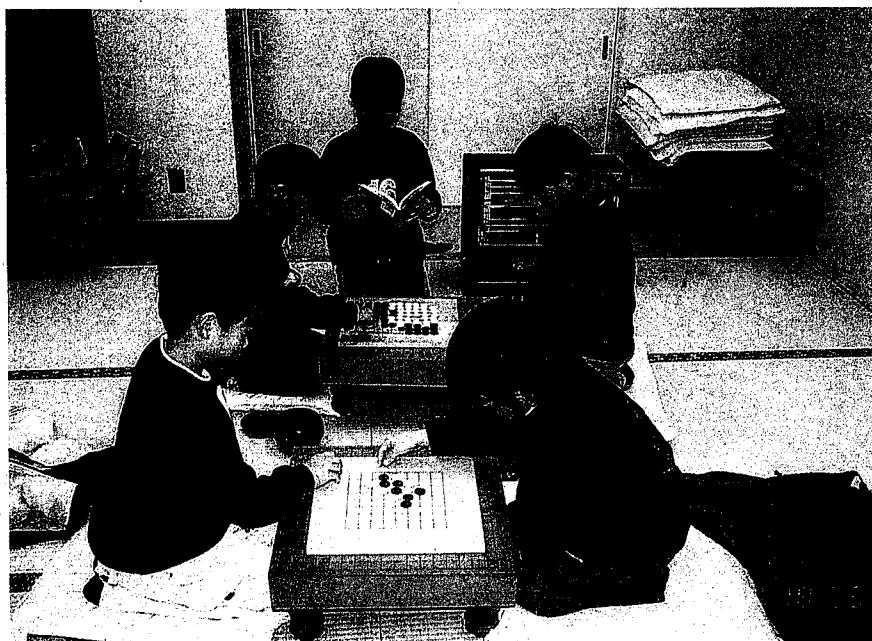
老友会のお世話で九路の碁盤と碁石を五面用意いたしました。メンバーは、小学校五年生三人、

四年生一人、三年生一人、二年生一人、一年生三人、老人一人計十名です。

まず最初にお互いに碁盤の前に正座し礼をして「お願いします」から始めました。全員初めて碁石を並べるのでルールを知りません。地所をとる子、相手の石をとる子等、いろいろありましたが、日がたつにつれ子供自身が自分で考えて打つようになりました。早いもので碁を始めてから四ヶ月になろうとしています。それぞれの個性が盤上にあらわれています。負けて口惜しがる子、勝つておごらぬ子といろいろありますが、二時間余りを一所懸命頑張っています。この風景を見ます時、私はこの「子供碁会」を発足させたことは、非常に意義があったと感じている次第です。

この子供達が碁を学ぶことにより、これからの人生を明るく活発に生きていく自信がつけば幸いに思います。どうか皆様この子供達が真剣に碁を打っている姿を、一度見に来て下さい。お待ち申し上げます。

以上



「成人式を迎えて」

竹田 一 貴

二〇〇三年一月十三日、みやづ歴史の館に於て成人式がとり行なわれ、出席してまいりました。

この式典は、二十才の記念として、良き思い出となるよう僕達自身で企画をしたものです。

僕も由良代表として参加させていたいただきました。それぞれの代表が中学校の当時の恩師を訪ねることに、栗田中学校の当時の先生方にメッセージをいただきましたという事で、連絡しましたら、どの先生方もこころよく集まってくれました。五年振りの再会をし、今、二十才となった僕達を見て、中学校時代の頃がとてなつかしく思い出され、今後も皆それぞれに頑張るようにと応援して下さいました。先生方、ありがとうございます

ございました。

大人になるということは、選挙権が与えられすべての事に責任を持ち、社会に貢献できる一員としての生活の第一歩を踏み出したという事だと思えます。

今、世界では、戦争、テロ、そして飢餓において罪もない人々を特に子供たちは、大変な被害にあっています。僕と同世代の若者も戦争に巻き込まれ、銃を片手に平和とは、ほど遠い所で命の危険にさらされています。それに比べて僕をとりまく現在の日本は平和で、飢えることもなく贅沢な毎日を過ごしています。それを思うと、これまでの生活を振り返り、自分の事しか考えてなかったと思います。今後は、自分以外の事、又、世界の動きについても関心を持つ

つて、常に自己研鑽につとめ、社会に貢献できる人間になりたいと思えます。



「京都人権啓発推進会議」会長 山田啓二京都府知事

「第一回みんなで創る人権五・七・五標語」

コンクール知事表彰者

青少年の部

優秀賞 由良小学校二年 大森 美沙

あそぼうよ なかまにいれて くれるかな

佳作 由良小学校二年 大森 美沙

やすんでる どうしてるかな おともたち

佳作 由良小学校一年 大森 志穂

キラキラと みんなのえがお かがやいた

佳作 由良小学校五年 山田久美子

さみしさも 仲間がいれば ふきとぶさ

由良の厄除けと八幡信仰

へ注連縄について

由良神社 高嶋谷卓之

由良神社の災難除けの祈願祭が毎年二月十五日に行なわれて

いる。

由良神社は昔由良獄の麓に祭られていたと聞いている。この山は御神水が豊富で「はくれい酒造」や由良の田畑の水源にな

っている。太古から生命の源である霊山（神体山）であることの証でもある。

由良神社の起源由来については先輩の小室哲寛様が知識豊富で度々教えて頂いています。聞きますと、昔、出雲（島根県）八雲村の熊野神社（出雲国一の宮）からスサノオの分霊を勧請し祭られたと伺っています。小生時代的前後は分りませんが、出羽三山神社の開祖（千四百二十年前）蜂子皇子が由良と関係

深く山形の日本海岸に同じ由良

の地名が残っている。（このこ

とは小室哲寛様が詳しいので聞

いて欲しい）

その後花の御所八幡宮から誉

田別尊（応神天皇）を合祀し八

幡宮として今も祭られている。

この祭神は武神で悪を退治し、

災難が降りかからないよう退散

させる御神徳があり、昔は武士

集団鎌倉幕府源氏の氏神、守護

神として、現在は厄除けの神と

して広く厚い信仰を集めている。

由良神社では毎年、神前の鳥

居に茅の輪を設け、厄退散の神

矢（破魔矢）を九本立て、矢九

（厄）除の信仰としている。こ

のことは全国八幡神社で太古の

昔から受け継がれている信仰の

証で現在も盛んである。人間生

命あるかぎり災事から逃れるこ
とはなくこれから先も脈々と信
仰の形として生き続けることで
しよう。

先に出羽三山神社について少

しふれましたが、ここは仏教と

の（主として密教）関係深く神

仏習合の修験道、山伏の神仏と

して信仰を集め霊的な力を大成

させている。出羽三山とは出羽

山、湯殿山、月山の三山社で出

羽の羽黒御本社が中心である。

明治の神仏分離令までは三十数

ヶ所の寺院を有していた。ここ

の神域に建つ五重ノ塔は国宝で

修験の山に相応しい山岳宗教の

形を今に伝えている。その開祖

である蜂子皇子と由良神社と関

係の深いのも不思議な縁を感じ

とることができ大変興味深いも

のです。尚、蜂子皇子は崇峻天

皇の皇子で推古天皇元年（約千

四百年前）に出羽三山を開山さ

れ、そして羽黒山を修験の根本

道場となし活動拠点とされた。

そこに修験と信仰の一体感が

みてとれる。

『注連縄について』と『日本

人とカミ信仰』については次回

機会があればにしたいと思いま

す。

乱文悪しからず。

旅は気儘に

丹後由良ターミナルセンター

暖冬と思っていただけに、一

月三十日、三十一日の寒波は忘

れかけた水道管等の凍結、破裂

した所もあり、びっくりでした。

線路のポイントも日中に凍結

して列車も止まりました。由良

岳に白く積る雪を見ていると綺

麗ですが、春が待ち遠しいです。

今の目の前は、色もさびしく

て寒々としています。温かい

温泉とカニを求めてみえるお客様は、この自然も癒やしコースの中に入っている様です。毎日にぎやかな所での生活から、一時のがれてリフレッシュする旅として。

ある母子さん、この丹後由良が大好きで、十年近く二人でみえます。動物(犬)を飼つてられてご主人は交代で旅をされるそうです。毎年同じ笑顔で優しく話しかけて下さいます。これからもずっと来て下さいと声をかけました。

毎回この公民館だよりに載せていた、だく内容が乏しい時もあります。いろいろな方の文を読ませていただいて勉強になります。

山椒太夫伝説、由良の歴史、由良岳西山、東山、お大師さんのお祭り、他にも、経験談、短歌、川柳等々です。

強風が吹くと列車が止まってしまふ鉄橋は、写真撮影に使われたり絵になります。昭和二

十八年の台風十三号をまともに受けたそうです。それでも八十年近くも私達を乗せて活躍している事に感激します。いろんな事を身近に教わります。

昨年十月二十四日には、由良公民館として名誉ある表彰を受けられました。諸先輩の方々、現在引き継がれている方々のご苦勞をねぎらいますと共に、これから先も続けて下さる事をお願い致します。

KTR久美浜駅から、駅のスタンプを集めて、この丹後由良に下車これから最後の西舞鶴へ。

— by 丹後の野良猫 —



安寿みかん

作家 清川 妙

京都府宮津市のKさんが、市内、由良の山に育った安寿みかんを送ってくださった。

濃い甘さの中に素朴な酸味も残るみかん。食べながら私は思った。これが私のもとに来るまでのいきさつを。

— 昨年の秋、その頃心にひびくことがないかキヨロキヨロとしてKさんは、新聞広告の中の私の新刊『ていねいに今を輝いて生きる』にふと心を惹かれた。私も輝いて生きたい。Kさんはすぐに図書館に走り、この本をリクエストした。そして、読後、私に出した手紙にこう書き添えた。

「講演会のご日程などあれば、ぜひお知らせください」

私もまた返事を書き、今年の新春九日の横浜高島屋の講演会

を知らせた。なんと驚いたことに、その日、Kさんは現れたのだ。会の後、私はKさんをティールームに誘った。

「お話をもっとたくさんの人に聴かせたい。宮津に帰ったら、どこかで講演会が開けるよう、動いてみます」

Kさんはそう言い、言葉の通り、動き回った。やっと、すてきな引受人が現れた。

ホテル北野屋の奥様Nさん。Nさんは私の本を読んでこう言ってくださった。

「この本は私たちに必要な本です。講演会を開きましょう。」

十月終わり、Nさんは私を伊丹空港まで車で迎えた。車中、私は、あの安寿と厨子王の物語について聴いた。「由良というところに山椒太夫の邸跡があり

ます」

天の橋立を見渡す北野屋の広間での講演会は盛会だった。最前列でKさんが目を輝かして聴いていた。宮津の人たちは皆温かかった。

「森鷗外の名作『山椒太夫』をもう一度読み返します」

私はそんなことも言った。

わが家に帰り、その本を読み返してみても、私は息を飲んだ。

格調高い名文の裏ににじむ哀切。これは平安の拉致物語だ。越後の海で人買いにさらわれた安寿は十四歳、横田めぐみさんに重なる。

「私の周りで『山椒太夫』はブームになっています」

私は、Kさん、Nさんへのお礼状にこう書き添えた。

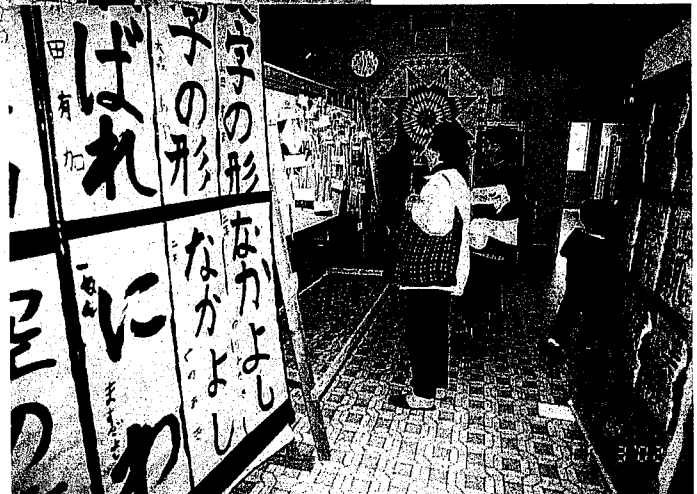
そして、Kさんから安寿みかんが送られてきたのだ。

出合いの繋がりやを、だれ一人途中で切ることなく、皆がアクティブに動いたからこそ、みかんは私のもとに来た。

みかんは昔のままの味がして、安寿の、弟のためにわが身を捨てたあわれが胸に来た。

付記

この一文は宮津市内のKさんから寄せられた。Kさんはボランティア活動で、由良駅からの乗降客である。



文化祭に想う

小松 恵子

十一月三日、心配されたお天
気でしたが、好天に恵まれ、文
化祭が開催されました。

婦人会は恒例のバザー、前日
からの準備、家では作ったこと
のない程のうどん出し汁、ぜん
ざい汁と昨年のマニユアルを片
手に、役員達は奮闘致しました。
準備し終えたのは、夕方近くに
なっていたと思います。

当日は早朝からお客様を迎え
るため、余剰野菜等の販売、ウ
エイトレス、調理場担当と役員
それぞれが分担場所に配属され、
準備にあたりました。

良い天候もあって、地区の大
勢の方が文化祭に来て下さり、
お昼前の時間帯はうどん、ぜん
ざいを召し上がって頂く方でい
っぱいでした。

調理場は猫の手も借りたい程

の忙しさ、ウエイトレスと調理
場との機敏な対応でお客様を待
たせない速さ、あまりの速さに
お客様をビックリさせてしま
う程でした。

余剰野菜等も販売員の力です
べて売って頂き、これらは役員
皆の連携プレイの素晴らしさだ
と感激致しました。

婦人会と聞けば、今の若いお
母さん達は良い印象をお持ちの
方は少ないのではないでしょ
うか……

役員になった時の負担、それ
を思うと婦人会に入会したくな
い、誰もがそう思っておられる
のではないのでしょうか。

私もその中の一人でした。で
も、幅広い年代層の中で得るも
のはたくさんあるように思いま
す。

いろんな交流の場で婦人会の
ことだけではなく、子供、家族
仕事面と経験豊かな人達の考え
方や意見を聞き、世代世代での
良い面を吸収することにより、
生活の糧にしていけるのではな
いでしょうか。

私は子供の成長段階を見ても、
おじいさん、おばあさんの中
育った子供は情緒豊かな、思い
やりのある子供が多いのではな
いかと思います。

自分だけの世界にこもりがち
な子供が多い、今の日本、それ
を思うと、子供から孫へと……
由良の歴史や伝統を絶やすこと
なく、守り続けることも、とて
も大切なことのように思います。

婦人会においても、おじいさ
ん、おばあさん、子供達と、皆
さんから「うどん、ぜんざいと
ても美味しかったよ」の一言が
どんなに役員達の心を癒やして
くれた事でしょう。

文化祭という行事を終えて、
婦人会役員達がそれぞれの思い

を寄せたことでしょうか。

バザーの後片付けが終って、
役員達は「ホッと」一息をつい
た時、涙が溢れんばかりの感慨
無量のおもいで、無事に終えた
成果を喜びあいました。こんな
感激を味わえるのも、婦人会と
いう組織の中で、それぞれに苦
労を重ねてきたからではないで
しょうか……

文化祭が開催されるにあたり
多くの役員の方々が、それぞれ
の想いで準備にあたってこれら
今年も無事終えることができました。

これも、ひとえに地区の皆様
様のご支援とご協力の賜と、厚
く御礼申し上げます。

文化祭が
いつまでも
幅広い、世
代層の中で
発展するこ
とを念じて
やみません。



そろばん指導の任務を受け

タイ国の田舎に一年間暮して

シニア海外ボランティア 西野啓子

タイ・ヤソートーン県の生活は慣れてしまえば快適そのものです。一般的に各家庭で食事は作りません。コンロの無い家も多くあります。外食だったり、出来上った料理を家へ持ち帰って食べます。

早朝から市は開かれていますし、白御飯一人前から売ってくれます。スープの屋台の所へ行くと食材が並べてあって、今日はこれとこれで作って、と注文してその場で熱々の出来上がり。ビニール袋に入れてもらって、もって帰ります。四人分くらいの量で百五十円、有名なトムヤムクンもこうして食べる事が出来ます。何と言つてもエビは最高！ピチピチの生きた大エビが一キ口五百円、これを塩ふり焼きにして大散財、日本ではとても

高くて口にする事はできません。ラーメン、チャーハン一食分四十円から六十円です。食べ物が口に合えば食べれば、暑さが我慢さえ出来れば、野放しの犬が怖くさえなければ、タイは本当に天国です。

このイサーンの郷土料理に、ソムタムがあります。未熟の青いパパイヤのサラダとも言え、びいのでしょうか。辛くて飛び上がったその味に、一年間虜になりました。本にダイエツト効果があると書いてあった事も、好きになった原因です。だからタイの女性は素敵なスタイルなのかと思つたものです。私にとつてソムタムは、美味しいだけで終つてしまいました！

その市場には何でも売つてあります。何でもと言っても本当

何でもありません。蚕のサナギは序の口、コオロギ、オケラ、サソリ、ゲンゴロウ、トカゲ、ネズミ、イモ虫、アリ、ハチの子、ハチの巣、魚は鮮度を示す為に生きたままで泳がせたりして売っています。生きた亀は、たらいの中でゴソゴソ動いています。しかし、この亀は食べるものではない事を後で知りました。

タンブンと言う行為で、買った亀を自然の中に放してやる事で、功德が積めると信じられているそうです。観光地の寺院で観光客相手に、小鳥を売りつけているのもこれと同じで、放してやる事でその人に功德が積めると言うものです。その小鳥は馴らされているので飼主の元に帰り、再度観光客に売られるのです。

観光地と言えば、入場料にタイ人と外人とに大きな相違がある事も知りました。タイ人の友達と一緒に旅行をした時は全部タイ人として行動し、その入場

料分でご馳走を食べたの思い出します。日本人と思われない様に、現地の普段着でスリッパ履き、出入口付近では決して喋らない様に注意したので、いつも無事タイ人で通せました。ホテルも値段に差があります。受付でタイ文字で記入すると半額と言う所もあります。

一軒家に住んだお陰で、タイの人達の中の生活を体験出来ました。結婚式に出席したり、雨季の大水で隣近所一面プールの中を二度も体験、法事と言う事だつたけれど、二百人程の客人を三日三晩の接待、これは想像できない騒ぎ様。

お別れの最後の夜は、近所の人達が持ち寄りパーティー。翌朝は涙々のお別れの儀式。人情にふれて、とても素晴らしいタイの一年でした。今、主人が教えられた日本語の生徒から、ひらがなカタカナ交りの立派な手紙が届きます。一息ついたら、あの子達に逢いに行くつもりです。

短歌

山口幸一

銃弾と、我との間の数センチ いま生き残りたる意味を問われて
国家この昏きテレーゼを突きつけて 生きのびし者、還らざる者
チマチヨゴリの少女に投げる石礫 其の根の深き排他をにくむ

山田 よしの

港口に潮満ちくれば鉄橋の脚を洗いて荒波の立つ
携帯の電波のようにわが言葉 きみに届けと仰ぎ見る空
庭に育つ大きな松を日ながめ 子に兵役の無きをよろこぶ

とよ子

にぎやかに孫らとかこむ夕餉膳 白寿に近き姑の手美し
啓蟄に茶杓の銘を考えつつ歩めば はな緒にぼたん雪降る
弧をえがき水戸口に入る舟ありて 亡き夫のかげおぼろに見たり

大森 萬喜子

四つ穴のミニのハーモニカ「赤とんぼ」奏でる老人の眼差しやさし
急降下うす墨色の羽根広げ鶴は寄りくる 輪切りのみかんへ
氷張る小さき池の水草はあるかなきかに緑をとどむ

山口美子

時とめてバケツの中に映りたる満月に遊ぶ 夜半のひととき
誰も居らぬお不動さんの落葉ふむ足もとより寒し 時の移ろい
京の街人力車にゆく若き娘らのピアスが光る 雲きれるとき

坂本 妙子

雪晴れの空は眩く輝きてそこはかとなく春の息吹を
冬になれば夏よしと言いい夏は冬と気ままに言いて喜寿を迎えぬ
ふつつつとおでんの煮える匂いして待ちおりやがて帰る家族を

藤本 史代

かたち無きものに焦るる危うさよ蜜さえ凝る冬の厨に
遂げがたき思いは淡くしらしらと雪は手桶の水に吸われる
愛憎のかつてのこころ懐かしむ春の流れの水に屈めば

中西 夏江

御名を刻まぬ四方寿朗師建立の由良の門歌碑をひとは 清しむ
清明の朝の日に照る歌碑も 素志たかき師も 天真の青
海境の風春潮を詠うべし 由良の門歌碑はふるさとに 光る

石田宗五郎家の『由良座』

晩年の良輝さん

濱野路 大 森 孝

(一)

『由良座』!! 私とそここの出逢いは、私が生後何ヶ月か経って、母の背中に揺られて、座の横の九郎助側の露地を通った頃に始まっている。生家から母の実家へ往復するには、由良座の横を行かねばならず、その露地を通るのが慣いであつた。

母の実家への捷徑を通る時にいろんな色彩豊かに描かれた職に感動したり、興行をひきたたせる囃子や音曲に耳を澄ませて心ときめかせたりするのは後年幼年期を俟たねばならなかつたが。——由良座の横を通る時は何故か心が開けて行くようであつた。まだ手にしていない未来がひらけるようで、程よいときめきと、未来への期待に心が震えた。そんな甘美さにも似た瞬

間を味わいながら通る脇の小路はまさに夢を見させてくれる、一角であつた。

母よりいくつか年かさの良輝さんは、母と同じ束崎(旧小字名)の生いたちという誼もあるので知りあいであつただろう。それだから、私が母に背負われて、九郎助側の露地を通るのを見ていたかもしれぬ。これは想像にすぎないのだが——

私の小三か小四の頃、旅芸人の一座の少女と、母の実家からの帰途、偶然出会つたことがある。或日の午後、楽屋からとび出した子役を見た。瞬間どきつとした。あまりに唐突だつたからである。顔や項といわず、白粉がベタベタ塗られていて、跣で出入り口からはみ出た、痛々しい様子。楽屋の中からは、何

やら怒鳴るような、年配の女性の声が響いた。例の少女は何かうろたえるように、楽屋の出入口の方へ戻つて行つた。

この間、僅かの時間だつたが、何やら胸騒ぎがして、この時は木谷家側の露地を通つて、横目で楽屋の奥を窺うようにして帰つた。何故叱られたのかな?

自分と同年輩の役者の子供を哀れに思つたが、就学してるかどうかまでは思い到らなかつた。この頃迄はまだ興行の木戸口を潜ることはなかつた。

初めて『由良座』の木戸を潜つたのは、実に小三の夏休みも入つて一週間は過ぎた頃だつた。私が小一の頃に覚えのある、『河原林宏平氏』なる京都市北区紫竹上堀川町住人で、二才年長の避暑客で、毎年の誼で交際を温めていた。(毎年一家を挙げて吉田家の離れへ避暑にみえていた) 宏平氏「大森さん、『由良座』へ行つてみよう? 芝居は嫌いか?」言われて私は、京都の町の人が、こんな田舎の鄙芝居を

何故見たいのかな? どうせ暇潰しなんだろうと即座に感じとつて「あつ、行こか。」と承諾してから、父にせがんで、「宏平さんと行くから」と言つて木戸銭をもらった。

かくて、小三に始まつて、二、三回『由良座』へ観劇の運びとなるが、この頃「文化」と感じられるものは、ここでの活劇と今一つは小学校の雨天体操場で催される戦意昂揚の映画等(後には中国戦線の報道に凝縮されていた)であつた。由良座へ入るには、木戸の東の小屋の廂が頭にさしのべてきて、狭い木戸口はよけい塞がつたようで、混雑していることが多かつた。それでも先を急いで、家の中へ入ると、正面の良い場所は、いつも人が座つていて、早く来たのにと、こぼしながら空いた場所を見つけてはかけ寄るといった具合。それも履物を小脇にかかえながら、駆け込むといった調子。まあ、それも右側に舞台へと続く花道の向かい側に陣取ら

ぬのがせめてもの幸いである。人々の芝居見たさのはやる心理が、観客席を奪いあうのである。場内はわいわいと思いいいに話はずむのでさながら『異界』の雑鬧ぶりで、そこへ煙草の煙りが充満するので、とめどもない混みあいになった。

どんな出しものであったか？ 往時茫茫。今言えるのは一つは活劇の終場面に五人の役者がそれぞれ口上をのべて、次々に番傘をひらいてゆく。『白浪五人男』、それと『暎の母』の馬場の忠太郎の劇、それに『名月赤城山』の仁侠劇などが記憶に残っている。

いつの活劇の場合も、後の場所より『間の手』が、静まりかえった場内をつんざくようにとってきた。(今思うとその仕掛人は、石田ファミリーではなかったか？)

私たち小六まで、郷土由良しか知らない学童にとっては、地形上、アクセスの上で他処へ歩いて行けない隔絶されたこの狭

過ぎる郷里に育っていると、向上の対象であり、手法なりは住居の周辺に見出さざるを得ず、それが本屋の『クマダ』を介しての読書、読書を通しての疑似体験であり、また由良座の仁侠劇を通しての大人社会の義理・道義といったものであった。少年は人間形成の上で、新奇な感化とよろこびを受けたように思われる。

そこに『由良座』を創りてくられていた先輩がいてくれた事は、私にとっては発達を遂げて行く上で大きな力づけになってくれたように思う。

私ほかの有名な『南部牛追い唄』を振って、この間の気持を表すならば：

田舎なれども丹後の由良は
処、処にや文化の殿堂よ！

大切な 大切な由良座の殿堂
由良に過ぎたる興行の殿堂よ。

芝居は感化を少年期に与えてくれ、多感な心を燃やしてくれた。そこで、石田良輝氏は起業の二代目であったと同時に社会教育

家としても私には映る。今その年齢(古稀を過ぎて)男一筋？に生きた、彼の魅力を、彼の面目をしみじみ思う。

いつ迄も若い心を失わなかった快男児に捧げることばは：

『青春とは熱であり、
意気であり、ふり返る時の
微笑みである。』

(二)

その後、石田良輝さんと逢ったのは、京都市山科区東野の京都市バス四一系統醍醐行(三条京阪始発)で、バス停南大塚へ降りたつた彼とであった。私は三十才をはるかに過ぎていて、昭和三十六年以降、府営山科大宅団地三〇三号室に居住の頃だったと思う。

目を輝かせながら、良輝さんは語る。「和代のところへ来たんや。」片手に小振りの荷物をかかえて歩いてみえる。私「そうですか。遠いところをお疲れでした。私もすぐ近くにいますよ。」良輝氏「ああ、そうらしいな。和代から聞いてる…。」

どうや、由良からお父さんもちよいちよい来るか？」私「ええ、前ほどではないんですけど、割によく来てくれます。」良輝氏「そうか、よかつたな。わしはいつも南大塚でおりに、井上町へ行くんや。こつちの方が一寸近いんで。(伊島和代さんは東野井上町で、私は大宅打明町。その間の距離は南北差二百米足らず)」

由良からの懐かしい一陣の瀆風が舞い込んだように、私にとつては、仮令その人が父でなくとも、良輝氏はとりわけ恩人の思いがあつたので、南極で日本人に逢つたよう、嬉しくてなつかしかつた。

良輝さんはその後も度々伊島和代さん宅を訪れていられた。子煩悩の方のようだったので、余生の時間を吾が子を支えて、日々を充実して生きぬかれたと思う。良輝さんの目の耀きが、昔のまま活活としていたのが、齢七十三才を超えた今の私には忘れられない。

由良の地名 その六

小谷 一郎

由良の地名について、これまで五回にわたって考えてきました。この由良という地名をつけて呼ばれているものとして「由良川」があります。この由良川は、人々がこの由良の土地に住みつくようになって、此処を流れる川で魚介類を採り、この川に舟をうかべて上下して、この地方の歴史が始まったのですが、この由良の人達は、この川とどうかかわり、この川をどう呼んできたのでしょうか。

由良の村の中を流れる小川であれば、宮川とか、新川とかと呼んで区別しなければなりません。脇の奈具神社のほとりや、上良の辺りを流れていた川などを改修して新しく流れをかえて大川に流れ込む

ように造られたので、これを新川と呼ぶようにしたのです。村なかの小さな川は、こうしてそれぞれに名を付けて区別しなければ、それらの川にかかわる仕事ができませんでした。どうしても名を付ける必要があったのです。ところが、由良で海に注ぐ大河は、村中を流れる小川と比較べたり、名を付けて区別したりすることはなかったのです。それは正に較ぶべくもない大河だったのです。

近世の、この地方の地誌「丹後国加佐郡寺社町在旧記」〔享保（一七一六〜三六）年間記録〕という記録を読んでみますと、

「東者大河にして、水潮の戦難所の湊なり。…(中略)：勿論、賣船及其員百三拾艘、…(中略)：伊勢丸、住

吉丸、日和谷丸、徳一丸其外色々銘を配し、家々之紋を染入任風繰出船」

と、情景を細かく記しているのに、河川の名などには全くふれていないのです。そして、これらの旧記を整理して万延二年（一八六一）編集された「丹後国加佐郡旧語集」下巻、「西郷諸運上」の部を見ても、その川筋の船着場のあつた土地々々の項を探しても、その川の名称を見出だすことはありませんし、特に、由良村の項にも、「如此川有テ水流ル先ヲ渡ト云」とのみ記されているだけで、その河の名称は見受けられなかったのです。嘉永五年（一八五二）筆録の「田辺旧記」にも「城下川数」として

伊佐津川
由里川
の二川があげられているだけでした。勿論、この城下というのは、田辺城の城下（旧西舞鶴であつた舞鶴町の町域に当る区域）

に限られており、今の由良川筋を含む在方の区域に属する地域は含まれてはいませんから、その区域を流れる河川は記載されてはいませんでした。そして、此処に由里川と記されているのは、今は高野川と呼ばれている川のこと、由良川とは全く関係のない川であり、由良川の誤りでもありません。同書中の記している「領中湊数」の項には「由良湊」の記載がありますが、その説明にも、「大川口、北風ノ時、舟出入り成り難シ」とあるだけです。

このように、由良に関する近世の地誌を見てきましたが、由良の大川には名称がなかったのです。そして、この由良の大川に名称がつけられたのは、明治に入ってからのことでした。その名称を決定する基準として、その河川が海に注ぐ処の地名をとってつけることにしたのです。そして、河口には、由良と神崎の二つの村があつた訳で

すから、全く問題がなかった訳ではないと思いますが、由良川と定められたのです。それで由良という地名のある所では、其処に流れる河川があれば、その川に由良川があつてもよいといえます。例えば、鳥取県の由良にも由良川がありました。由良で海に注ぐ川であるからその通り由良川と呼ばれることになったのです。

私は宮津（旧宮津町の区域）出身ですが、小学校の上級の時、「与謝郡誌」という小冊子（宮津尋常高等小学校教員の編さん）を副読本として、宮津を中心にした地誌を学んだことがあります。その中で、宮津の河川が記載されている箇所がありました。其処には「宮津川（大手川）」と記されていたのです。ところが、私達、宮津の間は、老いも若きも、子供ですら大手川と呼ぶのが当り前のことでしたし、誰一人として宮津川などと呼ぶ人はありませんでした。

担任の先生に質問して、どのようにならうかと教わったか、今は覚えていません。併し、正式には矢張り宮津川であつたのでしようか。土地の人が、誰一人として言いならわしたことの無い川の名とは一体どんなものだったのでしょうか。

明治以後、由良川と呼ぶことになった大川は、丹波、近江、若狭の三国の境に聳える三国岳を源流として、美山、和知、綾部、福知山、大江、舞鶴を流れる全長一四六キロ、由良の地域で栗田湾に注ぎ、これに合流する河川は、例えば、棚野、高屋、上林、八田、土師、和久、二俣などがあります。これらの支流を含めて「由良川水系」と呼ぶこともあります。この水系全体を由良川と考えて由良川と呼ぶことがあつたり、その本流は由良川であるとする呼び方があつたりするのでしょうか。最近のことですが美山へ行つたときのことです。土地のことを説

明している人が、その土地を流れている川のことを、その土地で呼びならはした川の名でなく由良川と呼んで、土地の説明をしているのです。これではその土地の風景も歴史も失つてしまふのではないかと思つたものです。

慶応四年、藤津で川を渡り（当時は、大川橋はまだ架かつていませんでした）、石浦に上陸した山陰鎮撫使 西園寺公望の一行は、由良の松原寺で休憩してから長尾の七曲八峠を越えて、宮津城下に軍を進めていったのです。由良を出航した北前船は、沖の大島、小島を目標にして進み、其処で棹を東に折ると若狭小浜港に入つていくことになりました。由良の河口は、波濤きびしき難所であると言われてきました。が、その沖も船を航行にあつたては、船の揺れも大きかつた宮津―海舞鶴間の連絡船「阪鶴丸」に乗つた人々も話していた

ことでした。

夏になつても塩作りのために浜をとられた村の子供達は川が泳ぐ所であり、北前船の運んでくる因州米を、宮津から買いつけに来た人はその様子を話してくれていました。

由良で作つた塩を積んだ三十石舟も、福知山までさかのぼつていましたし、そんな、色々の景色をくりひろげていた河でもありました。

そして、この由良を、明治三十八年九月過ぎて行つた歌人長塚節は

——九月廿四日、由良の港を立つ——

由良川は霧飛びわたるあかとき山の峡より霧飛びわたるの歌を残しているのも忘れられないことです。

（平一五・二・一三稿）



「由良の歴史をさぐる会」 発足三十周年を終えて

会長 四方 寿朗

昭和四十五年頃、当時由良小学校に勤務しておられた松本師正先生から「由良の船絵馬の調査を一緒にしよう」と誘われ、公民館長だった私はそのお手伝いをした。

脇 金比羅神社 二五枚

浜野路 玉司神社 五枚

港 照国神社 一〇枚

京都府下一番の数だと知った。そして又、山椒太夫の伝説や史跡の調査など、「同好会を作つては」と勧められた。

一方、今城力雄宮司は、当時ようやく盛んになった家の改築で、古い家具や民具がどんどん燃やされるのをご覧になって、何とか残したいと考えておられた。ちょうどその頃、マンションの東隣の枡岡功氏の宅地から

昔製塩に使った大きな塩桶が出土した。この貴重な文化財を何とか由良に残したい。その場所は。早速府へ補助金を申請して由良神社の絵馬堂を改修することになり、寄付を募り、同好の士に呼びかけた。

当時は小学校の校舎が改築中で、公民館は農協西側のカトリック教会を間借りしていた。打ち合わせに集まった私たちを前にして、ほの暗い電灯の下で、今城宮司が将来の抱負を、熱い言葉で語られた姿を思い出す。

こうして昭和四十七年四月二十五日「由良の歴史をさぐる会」が発足し、翌四十八年二月十一日、寄付された民具を収蔵する「由良郷土館」が開館した。あれから早や三十年、毎月十日、

郷土館での例会は一度も休んだことがない。現在会員十三名。これまでの歩みを振り返って見る。

昭和

癸・二 由良郷土館開館

ハ 「由良山椒太夫伝説旧跡めぐりのしおり」発刊

五・三 米屋甚平本「山庄畧由来」版木より印刷発刊

五・三 「由良の歴史」第一号発刊

五・七 「山庄畧由来」口語訳並びに解説本発刊

五・七 森鷗外文学碑建立に協力

五・一〇 山椒太夫屋敷跡に「心願地藏堂」建立

五・一〇 山椒太夫屋敷跡、如意寺、脇公園、港北野御膳宮、首挽松、和江国分寺跡にそれぞれ案内板設置

五・一〇 会員五名庄内由良訪問

癸・一三 「由良の歴史」第二号発刊

癸・一六

癸・一六 由良郷土館増築

癸・一八 庄内由良より訪問団を迎え「友好浜の宣言」

平成

三・六 由良郷土館の資料整理並びに記録

三・一三 会員中西夏江氏上田三四二氏の歌碑建立

四・一七 庄内由良より訪問団

五・一八 庄内由良を訪問する

七・四 港照国神社境内に「蜂子皇子船出の地」の碑を建立

八・七 「由良山椒太夫伝説旧跡めぐりのしおり」再発刊

八・八 庄内由良より訪問団を迎える

一〇・一四 北桑田郡美山町を訪問

一〇・一七 上越、佐渡へ研修旅行

一〇・二一 東京京楽座中西和久ひとり芝居「山椒太夫考」宮津公演に協力

十二 「山庄畧由来」再印刷

発行

十三 鳥取県大栄町へ研修旅行

十四 三 「丹後由良散策のしおり」発行

十五 結成三十周年記念事業

小倉百人一首曾禰好忠

の歌碑を脇公園に建立

十六 和歌山県由良町へ研修旅行

幸い由良は安寿、厨子王の伝説、それにまつわるたくさん

の史跡に恵まれている。また北前船の寄港地というより、荒海に鍛えられた優秀な船乗りの出身地である。そのため、航海日誌

や多くの船絵馬が残されている。由良川底の土砂からは、たくさん

の土器が出土し、山椒太夫の屋敷跡付近には石棺や土器経塚

などが発見されている。如意寺には身代わり地蔵とも呼ばれる

快慶作の地蔵菩薩、山椒太夫の首塚と言われる宝篋印塔がある。

春の夜は静かに更けぬ

はゆま路の並木のけぶり

箱馬車は轍おどりと

宮津より由良へ急ぎぬ

これは薄田泣蕪の詩「おもいで」の冒頭の一節だ。この他曾

禰好忠、加茂季鷹、森鷗外、長

塚節、三島由紀夫、上田三四二

など由良を舞台にして生まれた

すぐれた文学作品がたくさんあ

る。また由良は京都で名を馳せ

た幕末の名医新宮涼庭、また澤

井組を興して日本各地の鉄道や、

台湾総督府の庁舎を建てた澤井

市造を産んだ地でもある。

海、山、川の自然の景観に恵

まれたこの由良の地で、我々は

公民館をはじめ、地域の皆さん

の協力を得て、今日まで活動を

続けて来た。蜂子皇子の伝説が

取り持つ縁で、庄内由良とは二

十年以上地区ぐるみの交流を続

けている。「山庄畧由来」に、

山椒太夫の出身地と記されている

美山町を訪ねた時には、先方

の同好の人たちと、山椒太夫に

ついて夜遅くまで語り合った。

上越市では地元の方の案内で、

安寿や厨子王が一夜を明かした

逢岐の橋、安寿、厨子王の供養

塔、また人買いの山岡太夫の墓

を訪ねることが出来た。また佐

渡では佐渡の安寿姫塚へもお参

りした。重要無形文化財・佐渡

文弥人形芝居の見学では、丹後

から来たというので、急遽演目

を山椒太夫の「母子対面の場」

に変えてもらった。その他、鳥

取県の大栄町由良、和歌山県の

由良町など何処を訪ねても同好

の士の心温まる歓待を受け、大

変有り難く思っている。

今振り返って、私たちが長く

活動を続けて来られた一番の理

由は、会員各自が自分の好きな

事、得意な事を自由に続けて来

たからだと考える。「由良地域

発展のため」などと無理に頑張

らない。そして亡くなった諸先

輩のお陰。今城宮司のあの情熱

と先見の明がなければ、今日の

由良郷土館は存在しなかった。

堀家熊雄さんは、乏しい資金を

いろいろ工夫して、郷土館の内

装その他を日曜大工で完成させ

て下さった。達筆の中西茂さん

は、多くの案内板を手書きで、

また貴重な文献の復刻版を、根

気よく作って下さった。中西敏

雄さんは専門家に依頼して由良

小唄と由良音頭の録音テープを

製作して下さった。中西吉之

助さんは観光協会由良支部長時

代、森鷗外文学碑建立の先頭に

立って尽力された。

二十一世紀は地方の時代だと

言われ、地域の活性化が叫ばれ

ている。しかし田舎が都会の真

似をしても勝ち目はない。先頃

宮津市の「美しさ探険隊」が市

内を隈なく回っておられたよう

に、先ず地元民が自分の土地の

良さを再認識し、深く学び、愛

情を持つて外への働きかけが必

要だ。自分がその良さを理解せ

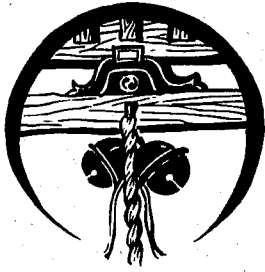
ずに、他へ宣伝しても駄目。目

先の利益を追って行事を立ち上

げても、長続きしない。有名な

芭蕉の句「名月や池をめぐりて夜もすがら」池に映る月を追っていたら、夜が明けたというのだ。その豊かな心と余裕。毎日慌ただしい生活を強いられている現代人に、是非必要なものだと思う。

由良には、探せばすばらしい宝の山がまだまだある。最近山椒太夫の伝説などを訪ねて、静かに由良を訪れる旅人が、少しずつ増えてきたと聞く。都会の真似をするのではなく、皆で力を合わせて、由良の特色を生かして魅力ある地域作りを、地道に続けて行くことではありませんか。私たちの会では、特に若い同好の士の入会をお待ちしています。
(十五・二・十四)



スポーツ

由良チーム頑張っています。

◎平成十四年十一月十七日

於 宮津市体育館

第二十四回

宮津市婦人バレーボール大会

優勝 由良チーム

◎平成十四年十二月八日

於 宮津市体育館

第二〇回

宮津市民卓球大会

団体戦 (A級)

準優勝 由良チーム

個人戦

男子A級 優勝 川崎 清

〃 C級 三位 熊田良雄

中学生女子優勝

日比重紀奈

編集後記

春が本当に目の前に！
 敵しい冬、寒さが身に凍みるシーズンをじっと堪えて迎えた春です。

卒業や入学等ご家族も楽しみが多い季節ではないでしょうか。

四万寿朗先生から「由良の歴史をさぐる会」発足三十周年を終えて、と題して寄稿していただきました。

「由良地域発展のため」などと無理に頑張らず、好きな事得意な事を自由に、この記述があります。三十年という歳月は大変貴重であり、由良地域に大きな変化をもたらした活性化に繋がるものと思います。

この度建立された「由良の門」の歌碑が地域の人たちの憩いの場、心を寄せる場として大切に受け継がれることを願っています。
 (飯澤)

